



2006 年 (平成 18 年)
8 月号 (No. 735)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

日本山岳会と私の登山②

日本山岳会におけるヒマラヤ
登山連鎖の軌跡(1)…………… 1

中央分水嶺踏査完了!!
信濃支部との共催でフィナーレ
踏査実施…………… 4

東西南北…………… 6

山の気象研究会の閉会について/
シュラギントワイトのテキスト
が見つかりました
支部だより…………… 8

宮城/宮崎
Climbing & Medicine・56…………… 9

活動報告…………… 10

総務委員会/自然保護委員会/
科学委員会/丹水会

図書紹介…………… 13

図書受入報告…………… 15

会務報告…………… 16

新入会員…………… 17

ルーム日誌…………… 17

会員異動…………… 17

INFORMATION…………… 18

さんけん通信…………… 19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10~20時
水・金…………… 13~20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時

日本山岳会と私の登山②

日本山岳会におけるヒマラヤ 登山連鎖の軌跡(1)

重廣恒夫

70年代から80年代にかけて、日本山岳会は高い目標をかかげながら、ヒマラヤ登山を実践してきた。
今回は各登山隊のリーダーとして、若い隊員を育ててきた重廣恒夫氏に、カンチェンジュンガ縦走から三國友好チョモランマ交差縦走までを綴ってもらった。

ヒマラヤ登山のはじまり

私のヒマラヤ登山への憧憬は、中学の時に読んだフランス隊のアシナプルナ登頂の記録『処女峰アシナプルナ』に始まった。高校時代に本格的に岩登りのトレイニングを始め、学生時代は岡山クライマーズクラブに所属して岩壁登攀

に打ち込んだ。RCCⅡの同人として、先輩たちのヨーロッパ遠征の記録を参考にしながら、目標は「ヨーロッパ三大北壁」の登攀であった。
トレイニングの主体は高所の岩壁を想定した積雪期の継続登攀の実践だった。当時は日本全国に多

くのライバルが覇を競っており、長谷川恒男もその一人だった。目標にした「三大北壁」に手を触れることはなかったが、1973年、未踏のエヴェレスト南壁の登山隊を組織した湯浅道男さんに声をかけられ、初めての海外遠征へと旅立った。残念ながら目標にした南壁は完登できなかったが、ヒマラヤ1年生として、4月から11月までの8カ月間をネパールで過ごした。カトマンズでの下宿生活、輸送担当としてカトマンズからモンターン中のキャラバンを敢行し、最初にベースキャンプに入り、登山終了後も隊の後始末に従事し、最後にカトマンズを離れた間に遭遇した多くの体験から、その後のヒマラヤ登山に役立つ多くのことを学んだ。

日本山岳会に入会

最初の第二次RCCエヴェレスト登山隊にはゼネラルマネージャーとして鹿野勝彦さんが参加していた。鹿野さんにインドの最高峰ナンド・デヴィに行かないかと誘われたのは、74年の末であつたろうか。日印合同で8000m近い高所での縦走登山を成功させるために、南壁登山隊に参加した隊員達にも声をかけたのである。
75年3月、ナンド・デヴィ登山隊に参加するため日本山岳会に入会した。隊員のほとんどは大学山岳部出身者であつたが、社会人山岳会からは他に高見和成と加藤保男が加わった。東京での準備は着々と進んだ。山岳部のOBや学生部員による梱包作業の手伝いは伝統を感じさせると同時に、若い

人達に「ヒマラヤへの憧憬」を萌芽させる場ともなっている感じがした。

77年には日本山岳協会が送り出した「日本K2登山隊」に参加し、灼熱の砂漠から始まるカラコルムの登山を体験した。79年には京都カラコルムクラブの「ラトックI峰登山隊」に参加した。前者はチームリーダーとして、後者は登山隊長としてであった。この頃から隊長としての役割分担で、登山・成功を獲得するための「現場リーダー」を担うことが多くなった。

80年には日本山岳会にとつては10年ぶりの大きな遠征となった「日本山岳会珠穆朗瑪登山隊」に参加し、その後85年に関西カラコルム登山隊でマッシュパブルム北西壁の初登山やブロードピークのアルパインスタイルでの登山を挟んで、76年と84年から95年まで日本山岳会の節目の登山隊に参加してきた。73年のエベレスト南壁からマカルー東稜まで一貫して流れていたのは、単なる既登峰の登山ではなく「より高い山を、より厳しいルートから、より難しい方法で登る」という、自分なりのアルピニズムへのこだわりと、勤めている会社を

辞めないでヒマラヤ登山を継続するにはどうしたらよいかという自問自答であった。

84年、カンチェンジュンガ縦走

76年、日印合同登山隊で挑んだインドの最高峰ナンダ・デヴィの縦走登山は成功した。8000m近い高所で、2つの頂上を結んだ成果であった。当然、次の目標は8000mを超えた高々所での継続登山である。カンチェンジュンガ縦走計画は、ナンダ・デヴィの縦走登山を成功させた直後から始まった。75年にインド22番目の州として併合されたばかりのシッキム側から、カンチェンジュンガの南峰・中央峰・主峰・西峰の8500m級の全山縦走を実現しようと、インド登山財団や政治ルートを通じて折衝した。

しかし、折衝は難航した。その間にも未踏峰であった南峰や中央峰が初登山され、山学同志会隊による北壁の初登山、日本ヒマラヤ協会隊による縦走の試みなど、いつまでもシッキム側に固執していかれなくなった。82年にネパール側からの登山計画を決断。その翌年、ネパール観光省からカンチェンジュンガ山群の登山許可を取得



南峰から主峰(右)、中央峰へ向け、カンチェンジュンガ縦走を開始する

した。すぐに準備活動に入ったが、いずれも既登峰であり登山記録や写真資料の入手も容易で、登山計画の作成ははかどった。

しかし、資金調達は困難を極めた。一度に8000mを超える峰を登山・縦走する登山では、前進基地以上での活動が複雑となり、要する物資も膨大で多額の資金が必要であった。資金調達の方法として日本テレビ放送網と読売新聞

社の後援を得るため、反対意見も多かったが縦走計画に「ハンダグライダー飛行」を組み込んだ。その後「カンチェンジュンガ委員会」も発足して対外的なバックアップの態勢が整った。また計画を推進する中で、85年の創立80周年記念事業にも組み入れられ、その後の準備は順調に進み、84年1月末には先発隊が成田を発った。

長いキャラバンの末、3月7日、ベースキャンプに入った。若手を中心とした登山隊員23名、ハイポーター35名、学術や報道隊員を含めると総勢77名の大所帯を鹿野隊長が統括し、私は前進基地に陣取り、縦走の始まりとなる南峰へのルート工作や各隊のハイポーターの配備、荷上げ計画の調整などを行なった。登山の途中では雪崩によるキャンプの埋没など多くの障害はあったが、世界で初めて8500mハイラインの縦走に成功し



1984年5月20日、カンチェンジェンガ縦走に成功。
中央峰頂上のサポート隊

た。ただ主峰登頂はグレート・シエルフ経由となったこと、西峰にはまったく向くことができなかつたことなど力不足も痛感した。併せて最後まで南峰や中央峰・主峰のルート工作や荷上げに従事しながら、時間切れで登頂できなかった隊員が出たことも反省点である。

88年、チヨモランマ交差縦走

当初この計画は、東海支部が中国とかかわりを持ち、ネパール側との折衝を経て、86年1月に本部に計画委譲の申し入れがあり、同時に読売新聞社から読売グループ全体をあげてこの登山計画を支援し、共催したいという申し入れがあったものである。

86年5月の総会で日本・中国・

ネパールの三国友好登山計画実施の承認が行なわれ、これまでにないヒマラヤ登山計画が進行することとなった。友好登山隊での私の役割は北側の登攀隊長として、5月5日にチベット側から3国の登山隊員を頂上に到達させ、ネパール側に下ろすことに加えて、3名のテレビスタッフを頂上に到達させ、8848mからの大パノラマを世界に流すためのマスタープランを作ることであった。タクティクスに関しては、北側は日本と中国の代表が、南側は日本とネパールの代表が協議して作成することとなった。いずれも日本で原案を作成してそれをもとに検討するところが多く、北京、カトマンズ、香

港、東京での打合せに忙殺された。隊員に関しては、5月5日に予定通り交差縦走を成功させるための隊員選考を行なった。もちろん経験者だけではなく、今回の経験を糧として今後大きく飛躍する若い隊員を選ぶことも忘れなかった。選考の最終段階で、当時ヒマラヤで最も活躍していた山田昇の参加が決まったので、成功の確率は一段と高まった。

日本・中国・ネパールの三国は、元来登山の目的も異にしているし、日常生活している言葉とか食習慣等の生活環境が異なっている。それを極限の生活のなかで無理に「友好」という2文字に収めようとすると、各国の隊員がお互いに気遣いすることになり、高所登山という閉じ込められた空間での、長期間の生活によって生じる軋轢が大きくなると考え、第一期・第二期は別々のテントで各国自由な生活をするようにした。ただ、最先端を行くルート工作、荷上げに関しては、三国が平等にその任に当たることにした。こうすることによって徐々に良いチームワークが形成され、最終アタック時の三国隊員間の信頼感となつてあら

われた。

ルート工作に関しては、最強メンバーを最先端に出した。その結果、予定通りに計画を進行させることができたし、後になってルート変更・修復をする必要も生じなかった。スピーディな登攀こそが、安全を確保する最良の方法であるからである。ただし、最先端で行動する隊員にどうしても過度な負担がかかるきらいがあるので、3日行動、2日休養という原則を守り、特定隊員への疲労の蓄積が生じないように配慮した。しかしいづれにしても日本人隊員に大きな負担がかかったのは事実である。目標を成功に導くためには、チームを形成するメンバーが、自分の持っている能力を温存することではなく、お互いへの思いやりを発揮することによって、チーム全体の能力を向上させる事ができる。

文化を異にする三国の隊員が集まって初期の目的を完遂するということは、各国隊員のライバル意識はもちろんの事であるが、競い合った後に生じた連帯感によって、目的意識が明確となり、最終的に「友好」という2文字に熟成されると信じたからである。

中央分水嶺踏査完了!!

信濃支部との共催でファイナル踏査実施

「日本山岳会創立100周年記念事業の国内登山の部として計画された中央分水嶺踏査は、2004年初めに着手されました。そして、全国の25支部ならびに首都圏17の委員会・同好会の会員約1000名が参加し、完全踏査を目指して努力してきました。本日多くの会員諸兄の参加を得て、信濃支部の担当箇所である「三峰山から鷲ヶ峰」への踏査を実施しました。これをもって、北海道から鹿児島県まで約5000^キに及ぶ日本中央分水嶺踏査が完了したことを宣言いたします」

06年6月17日、初夏の夕暮れ、灰緑色に染まった八島湿原に、信濃支部分水嶺担当責任者、中野前支部長の声が響いた。2年半にわたって続けられてきた中央分水嶺踏査は、成功裏にその幕を閉じた。

「無謀な計画」として

中央分水嶺踏査計画、その策定・実施は紆余曲折の連続だった。日本山岳会創立以来のモットーであ

中央分水嶺踏査委員会

る「未知のものに挑むパイオニアスピリット」を追求する機会は一世紀の今日、残念ながら、国内にそう多く残されているわけではない。

そのなかにあつて、唯一、最善のものとして企画立案されたのが、北海道は宗谷岬から九州佐多岬に至る約5000^キの中央分水嶺を、会員一人一人の足を使って線で結ぼうという壮大な計画であつた。

とはいえ、全体の70^割近くは登山道がなく、GPSを駆使したとしても、ルート選定に難渋を強いられるのは明白であつた。平均年齢が60歳を超えている山岳会員に、果たしてそれを完遂することができなのか。企画を知らされた支部会員から、「現場を知らない本部の連中が机上で練り上げた空論」という厳しい批判の声があつたのも、無理からぬことであつた。しかし、支部長会議などを通して、計画の意義が徐々に浸透し、04年2月21日に開催されたシンポ

ジウム、各支部の分水嶺担当者会議を経て、同事業が本格的にスタートした。

少しずつ、踏査距離を延ばす

踏査にあたり、中央分水嶺踏査委員会は全区間を27に分割し、それぞれ25地方支部（各1区間）と17の委員会・同好会（2区間を分割）に担当してもらうこととした。各支部・同好会では実行委員会等が組織され、会合に会合を重ね、緻密な計画が練られた。コースによつては、積雪期、あるいは残雪期でなければ踏査できないところ



三峰山から和田峠へ向かう参加者。右奥が目指す鷲ヶ峰

も多く、ヒマラヤ登山経験のある会員の単独山行によつてようやく踏査された箇所もあつた（越後支部）。藪の深さにはほとんどの支部、同好会が悲鳴をあげた。2^日を超す藪に行く手を阻まれ、精根尽きて敗退すること数知れず。取材の新聞社から「ぜひ藪こぎの写真を」というリクエストも多かったが、写真を撮る余裕などなく、進むだけで精一杯のありさまだった。それでもねばり強くアタックを繰り返し、少しずつ、少しずつ、踏査距離を延ばしていった。「藪から掘り出した分水嶺（山陰支部）」という言葉が、その苦労を如実に物語っている。

踏査が進むにつれ、各支部・同好会から委員会に送られてくる山行報告書も数を増した。ホームページ上の日本地図には、踏査済みを示す実線が着実に延ばされていった。04年5月31日に踏査率13

踏であったものが、同年10月31日30・8踏、05年6月30日67・1踏、同年12月25日86・1踏、06年4月25日には94・1踏に達した。

分水嶺あれこれ

山国たる日本で分水嶺といえは誰しも山の尾根を思い描くが、ユニークなものも散見された。ゴルフ場の中を走っているもの(熊本支部、山梨支部)や自衛隊基地を貫いているもの(東九州支部)もあり、粘り強い交渉といった山行以外の苦労もあって、会報「山」ではその踏査顛末が紹介された。踏査中は、GPSで位置確認を行ないながら、三角点の保存状況、2



ファイナル踏査参加者 (八島湿原にて)

万5000分の1地形図との相違、植生などの自然環境、分水嶺にまつわる秘話などの調査もあわせ実施された。地下40mの深さに埋もれていた三角点を掘り出したこともあった(北九州支部)。地形図にない林道や人工建造物も、ひとつひとつ報告書に加えられ、これらは貴重な資料として国土地理院に提供されることになっている。

掘り出し物といえは、踏査をきっかけに、峠や分水嶺にまつわる水の歴史を紐解くこともあった(山形支部「横川堰」・東海支部「峠の今昔」など)。津軽海峡、関門海峡ともに海底トンネルを踏査し、北海道・本州・九州の各島をつなげたことも特筆に価しよう(北九州支部、首都圏の柳下棟生会員)。また、全踏査区間の20踏にあたる1165^キを担当した北海道支部の活躍は見事なものであり、完全踏査への道を開いたといっても過言ではない。その8割が猛吹雪、滑落、雪崩の危険と真剣に向き合っている積雪期の踏査であった。ファイナルを飾る

6月17日、上諏訪に集合した80名は、残る最後の区間、三峰山(鷲ヶ峰)八島湿原へと向かった。

分水嶺委員会および信濃支部の共催として実施されたファイナル山行は、北海道、東海、山梨、首都圏からの参加者で熱気溢れるものとなった。折りしも雲間から顔を覗かせた陽の光を浴びながら、参加者全員が6班に別れ、それぞれ信濃支部のリーダーに引率されてルートを踏査していった。前日の雨で登山道はかなり滑りやすくなっていたが、山座同定や植生観察しながらの山行は実に楽しく、ファイナルを飾るに相応しいものとなった。

至る所に咲いていたツツジの花は、我々を祝福してくれているかのようであった。旧中山道の和田峠で昼食をとり、最終班が目的地の八島湿原駐車場に着いたのが15時45分。その後、中央分水嶺踏査完了の打ち上げ式が行なわれた。

中野前信濃支部長の完了宣言(前述)、そして、平林副会長から「中央分水嶺をすべて踏破したことは、日本山岳会として非常に意義あること」と祝辞があった。続いて同計画策定のきっかけとなった分水嶺研究を長年続けている近藤善則会員が「私は地図の上に線を引いただけですが、皆さん一人一人が

その線を実地につないでくださいました。これは、本当に素晴らしいことだと思います」と結んだ。その後、田邊副会長の発声で高らかに乾杯し、カラカラの喉をビールで潤し、踏査完了を祝した。

「成果報告会」へ向けて

中央分水嶺全区間の踏査は、1350名(実数)の参加をもって成し遂げられた。内1043人が日本山岳会員、307人が一般からの参加者(非会員)であった。踏査山行を通じて、各支部の活動がより活況を呈してきたことは、うれしいニュースであった。なかには、中央分水嶺にとどまらず、さらに支線の分水嶺にまで踏査を広げたところもあった(関西支部)。なお、踏査完了は、参加会員の奮闘努力もさることながら、非会員、あるいは地元の方々をサポートなくしては成しえなかったことも、忘れずにおきたい。

踏査の全記録は、最終報告書およびCDに収められ、本年12月をめぐりに出版される。そして来年2月17日には「踏査完了フォーラム」を開催し、一人一人の足でつないだ成果を紹介する予定にしている。

(事務局長 森武昭)

N
—
東 西 北
—
南 南 南
—
S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

山の気象研究会の閉会について

奥山 巖

山の気象研究会は、今年(2006年)6月の第50回山の気象シンポジウムをもって閉会することになった。

昭和20年代後半から30年代にかけては登山ブームの真つ盛り、それにつれて山の遭難も増え、とくに予想していなかった悪天候にぶつかったとか、雪崩に襲われるなどの気象遭難が急増していた。

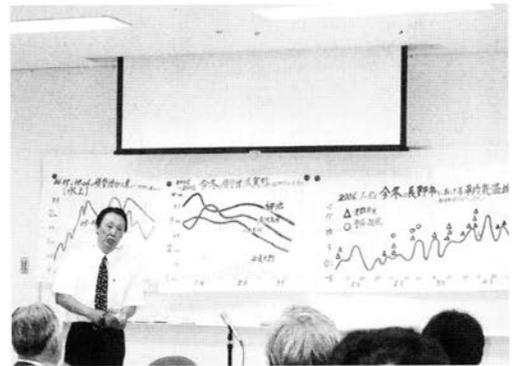
その遭難の多くが事前に天気図を見ていれば防げた遭難であった。

そこで昭和31(1956)年6月、気象庁山岳部が都内の主な山岳団体に呼びかけて、山の遭難対策を協議した(山の気象座談会開催)。会議の結論は、山の天気とか遭難に関する各山岳団体の体験を聞いて

て参考にしようというものだった。

第1回山の気象シンポジウムは、昭和32(1957)年6月、気象庁会議室で開催され、盛會裡に終了。たいへん参考になった。こういう会を今後も継続的に開いてほしいという要望が出され、会終了後、気象庁山岳部とは別の「山の気象研究会」が設立された。研究会は山の気象シンポジウムの他、気象遭難防止のための活動も行なうことになった。日本気象学会からも、この会は山の気象遭難を防ぐために有効だからと、気象学会の分科会の形で行なうことが承認された。

創立直後の10年間くらいは研究会の活動は活発で、年1回のシンポジウムの他、2、3名の講師を囲んでの研究会例会、地上天気図の書き方・見方の講習会、「山の気象講習会、雪崩講習会」、また、山



小岩清水氏による演題の解説

を歩きながら雲の見方、雲と天気図との関係を教える懇親山行など多くの行事が催された。

研究会としても、山の気象知識の普及を目的として、『山の気象Ⅰ、Ⅱ』を発行(昭和36、39年)した。平成3(1991)年には、日本気象学会、日本山岳会の推薦を得て、秩父宮記念学術賞も受賞した。山の気象研究会の役割は、一般登山者や研究者の山と気象に関する調査、研究の発表、討論の他、気象学会や雪氷学会で論ぜられる難しい話を、登山者にもわかりやすく話してもらったり、解説してもらって、専門家と登山者との中間的な橋渡しをすること、ラジオ

を聞いて書く地上天気図の書き方と見方、とくに気象遭難に遭わないうような事前の予測の講習にあつた。

しかし創立以来50年もたつと、会を運営する役員たちの高齢化で、年1回の「山の気象シンポジウム」の開催だけがやつとという有様になった。また今では、天気図を書かなくとも、ラジオ、テレビでは頻繁に天気予報や解説が行なわれており、携帯電話でも最新の情報が随時得られるようになってきた。講習会を開いても人が集まらなくなった。昔のように勉強してまで山へ行こうという人は少なくなつたし、いざとなれば携帯電話で助けを呼べるという利便さもアダとなつていた。こういう情勢になつたので、研究会の一つの役割は終わったとみて閉会することにした(なお閉会後も研究会内の有志による小規模の座談会は別に計画されている)。

最後になつたが、日本山岳会の方々には、講師派遣などで多くの方に来会いただくなど、長年にわたつて後援をいただき、厚くお礼申しあげたい。

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

宮城支部

梅雨払い山行―鳥海山

6月は梅雨の季節、山は雨の日が多い。そのため、当支部の6月山行は梅雨払い山行と称している。今年、6月24～25日の鳥海山梅雨払い山行は、いつもとは趣向を変え、七夕会との共催とした。七夕会とは、主に、近隣各支部の有志会員による年に1度の交流登山会である。

参加者は、千石支部長はじめ当支部会員、青森・岩手各支部会員、それに東京から駆けつけてくれた中川武会員など16名である。

当日は鳥海山麓、JR遊佐駅から集合の後、さっそく二ノ滝駐車場から宿泊地の万助小屋へ向かった。梅雨とは名ばかりのような好天に、一行の足取りも軽く、小屋には16時ごろ着いた。付近にはシラネアオイが咲き誇り、間近に雪渓を仰



鳥海山の万助小屋で。後方、筈(しょう)ヶ岳

ぐ標高10000メートルの別天地である。夕食会は満天の星空のもと、鍋を囲んで野外で開かれた。本支部間の意見交換、それぞれの近況報告、その合間あいまに、歌や詩吟がとび出す。ここに、喝采を受けた菊地岩手支部長の即興を紹介しよう。

五月雨の残雪のこる 鳥海山

翌日も快晴。雪渓の上を約3時間ほど登り、鳥海湖南岸に着いた。花々の開花はもうじきといったところだが、湖面は未だ雪と氷に埋もれていた。

しばらく休憩し、10時、下山に取りかかる。実は、この下山ルート「南ノコマイ左岸ぞい」こそ、青森支部の高橋毅会員が推薦するコースであり、今回山行のメインコースなのである。

雪渓を滑り、千畳平を横切ってしばらく下ると、やがて凄まじい轟音とともに、南ノコマイ上流部が脚下深く見えてくる。豪壮かつ強烈な雪どけ水のほとばしり、それは下流に下るにつれ一層華々しく、加えて大小さまざまな滝の連続となる。龍頭ノ滝、三ノ滝、二ノ滝、終点近い一ノ滝手前の橋を対岸に渡り、15時、全員元気に駐車場に着いた。

鳥海湖から下ること5時間のハードなコースではあったが、見ごたえ十分、さすが推薦コースと納得する。梅雨期とは思えぬほど晴れ渡った鳥海山で、七夕会との交流を深めた梅雨払い山行であった。

(三宅泰)

宮崎支部

森づくり育林作業

平成13年および国際山岳年を記念し、14年に植樹した宮崎支部森づくり(三カ所のフィールド)の育林作業も5年目になった。

6月18日、21名の参加者は、雨が残るなか、6時、宮崎市を出発。まず最初のフィールド、西都市の「ロキシーヒルの森」に向かう。ここは地元の図師さんの私有林で、15センチの杉林を少しずつ切り開き、森づくりを行なっている。ログハウスやツリーハウスがあり、多くの団体が森林学習の場としても活用しており、宮崎支部もその一角に植樹している。

作業を始める頃には雨も止み、絶好の下草刈り日和となった。植栽して間もない頃は笹が多かったが、手入れのせいからは萱が繁茂している。活着の悪かった所は補植しており、小さな苗木があるものの、だんだん林に向かって成長している。

ところが、ヤマザクラの若木が数本軒並み胸高位で折られている。誰の仕業かといぶかったが、鹿の仕業だと知る。全国的に鹿の害が



森づくり育林作業での下草刈りのようす

(前原満之)

問題になっているが、ここでもかと複雑な気持ちになる。虫害で倒れているのもあり、やはり樹木は大自然のなかでは試練が多い。1時間15分で一気に作業し、山は見違えるほどきれいになった。一人ひとりの力の結集の結果である。疲れた体に鞭打って、次のフィールド、田野町の「田野の森」に向かう。約1時間30分の移動である。ここでの作業の頃には、晴れて日差しも強くなる。やはり早朝からの行動が正解であった。予定していた作業を1時間で終え、眼下に広がる宮崎平野をながめながら昼食をとり、帰路についた。

Climbing & Medicine · 56

山地の虫刺され対策

秦 和寿

山では予期せぬ虫刺されに遭遇することがある。山へ行く前から病害昆虫類の情報を得ておけばパニックにならないですむ。丹沢でのこと、女性の登山シャツが10cmほど血液で汚れている。ヤマビルである。ヤマビルに吸着されても、痛くも痒くもないので、本人はわからず他人からの指摘で気づき慌てる。山での害虫情報を頭に入れておく必要がある。

ここでは四季の害虫カレンダーを記す。4～5月にかけ低山では、顔の前、特に目の付近に小さな黒い虫がまとわりつく。手で追い払っても執拗にくる。実に不快だ。この虫はメマトイというコバエの1種で、涙を舐めにくるのである。

少し高度を上げると、今度はブユである。4～10月まで発生する。頭の付近を10匹以上が飛びまわる。実にやかかいである。ブユは蚊の様に吸血するのではなく、まず皮膚を口器で噛み血液が出たところで舐めるのである。都会人はブユの噛傷の経験が少ないので、赤く腫れあがるのが特徴だ。数日間アレルギー反応で苦しむ。ブユが異常に多い場合、クマなどの野生動物がいる場合もある。この時期、北海道などではヤブカが一斉に襲って

くることがある。

同じ時期、スズメバチとマダニが問題となる。地中の巣に振動を与えると、スズメバチの襲撃を受けることがある。身体を低く避けることが賢明だ。万一刺されたら、水で良く洗い冷やす。さらに虫刺され用の軟膏を塗布する。アンモニア類でなく、ステロイド含有の虫刺され軟膏を持参することが必要だろう。マダニも実に厄介である。藪歩きをすると寄生されることがある。しっかりと吸着されると、むしりとっても口器が皮膚に残る。無理やり取らず、ベンジン等をぬり、ゆっくりと取り除くことになる。外科的処置だと大きく皮膚を除去する。マダニが媒介するライム病は国内では病原性が弱く問題とならないが、日本紅斑熱を起こすリケッチア症は散発しているので、大きな紅斑が皮膚にでたときは治療が必要だ。

山里では春と秋に恙虫病の発生も知られる。山の柴刈りや山菜取りで、ダニの1種であるツツガムシに寄生され感染がおきる。刺口と発熱が特徴だ。蛇毒ではマムシが問題である。噛まれたら早急に医師の治療を受けることにつける。自分で思い込みの切開などしてはいけない。冒頭のヤマビルは発生地域が限定される。忌避剤や塩を使用しているが、多数生息している場合、完全に防御することは不可能だ。

防虫対策は、帽子、長袖、長ズボン等の着衣と虫刺され軟膏及び忌避剤等が欠かせない。単なる山歩きでなく、自然保護など山林で藪の中に入るときは、しっかりした害虫対策が望まれる。防虫対策をすることによりパニックにならないですむ。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

総務委員会

平成18年度第2回 支部長会議

5月の総会に続き、本年度2回目となる支部長会議が上高地の山研で7月1・2日、開催された。

上高地の山研を訪問したことのな
い支部長もおり、山研を理解する
意味のある機会となった。

初日に、なぜ「上高地山荘」と
呼ばないで、「上高地山岳研究所」
として現在に至っているかという
説明があった。また、「その歴史と
今後のあり方」について資料によ
って山研委員が提示、環境に優し
いミニ水力発電実験設備の特長と
苦心談が森武昭氏から静かに紹介
され格調高いシンポジウムの雰囲気
のなか、各支部の活動報告がな
された。

圧巻は2日目の午前中であつた。
松田雄一氏の特別講演「日本山岳
会の伝統」は、『百年史』編集に90

周年のときから携わってこられた

だけに、活字にできなかつた裏面
史にも触れて、貴重な思索の時間
となつた。静かな山研で重厚な日

本山岳会の先人の足跡を知らされ、
現在の新しい会員に年輪の重さ・
精神の系譜をどのように伝承した

らよいか、それぞれが自問自答
した時間であつたろう。その内容
を私のメモからひろつてみた。

●松方三郎「支部はランチでは
ない。ザ・ローカル・セクション
である。支部独自の山岳文化は崇

高なものである」

●桑原武夫氏のような、素晴らし
い活動をされた先人が名誉会員に
なっていない。会則上で、制度上
でミスはなかつたか。

●大正9年に会員番号ができてい
る。

●支部長全員が評議員だつた時代
もある。

●評議員は理事の下という考え方

もあつた。

●初期の日本山岳会には、日本中
の名士の多くが入会し、10年以上
も継続している。

●大正デモクラシーの世相の影響
か、日本山岳会の運営も当時はの
んびりしている。

●マナスル後の50年について。

これらの項目一つについて話し
あつても数時間を要するであろう。

支部長会議の重みを感じたのは私
一人ではあるまい。今回の上高地
での支部長会議に副支部長が出席

された8支部は、今後の人脈とし
て良い経験をされたに違いない。

また、この日の議題に入る前に、
橋本龍太郎元首相の計報がもたら
され、全員で黙祷をささげた。

私は暑さに弱く、夜、穂高の部
屋(8名が寝ていた)から外気に
触れようと思つて、そつと廊下に出

た。汗をかいて3回も部屋を出
た。そのつど、スリッパがきちん
と揃えてあるのに気づく。誰かが

気をつけていくのださるのである
う。ふと、支部長会議の品格を感
じた。

雨の上高地であつたが、非常に
充実した2日間となつた。今後の
課題も多く検討され、支部の会員

に少しでも多くのことを伝えたい、
そしてもっと山研を活用しなけれ
ば……という気持ち強くした。

最後に、汗をかきながら食事の
世話をしてくださつた坂本正智山
研委員をはじめ、関係者の方々に
厚くお礼を申しあげたい。

(北海道支部長 新妻 徹)

自然保護委員会

神津島自然観察会

6月3・4日、神津島自然観察
会を行なつた。参加者は、東京近
郊のほか、新潟・長野・岐阜・関

西・熊本支部と全国から20人だ。
不思議なもので、砂漠化した地

形と湿地帯が、山上に共存してい
る。ピンク(とき)色の可憐なト

キソウ、白い花のヤマトキソウに
出合つた湿地の千代池、裏砂漠、
表砂漠にこんもりと小山状に点在

する大島ツツジ。どちらも、山頂
付近である。

神津島の天上山(572m)は
低い山なのに、NHKの「花の百

名山(オオシマツツジ)」に選ばれ
ただけあり、不思議な植生の山で

ある。池は、雨水がたまり、乾く
と干上がる窪地で、夏に池の水が



樹齢1000年のオオシマトツジ (常に強風が吹いているため1000年経っても背丈は伸びない)

引き始めるといつせいに芽を出し花を咲かせるイズノシマホシクサ、サワトウガラシ。スギゴケ、ミズゴケが育つ湿地。一方、流紋岩が砕けて砂になり、冬の強風で砂が集まり、砂漠となり、緑が美しいオオシマハイネズ、矮小化したクロマツ、ハコネコメツツジが育つ。大学院時代にこの島の植物の研究をされた岐阜大学の西條先生はじめ、植物に詳しい皆さんからいろいろ教えていただいた。南の島なのに、東京より温度が低い。

港から神津島在住のガイド2人の案内を受ける。黒島登山口へ車道を歩くが、道路脇の大島桜のサクラランボ、カジイチゴ、八丈イチゴ、桑の実を次々に口に入れる。

おいしい。高曇りで山頂を覆っていた雲が、どんどん上へ上がってゆくが、山上の周囲コースは、雲の中。下は晴れていても、いつも霧に包まれている天上山は、それゆえに豊かに植物が育つ。登山道脇の土手に、モウセンゴケ、ジウウモンシダが生えている。湿度と強風、この二つが特徴的である。林の中には、ヒメトケランがたくさん咲いている。頂上付近には、サクユリ(島では、シヤクユリ)が一面に。花が咲く7月は、よい匂いに包まれるのだらう。リョウブの林を歩いて宿まで下る。

4日、朝食前に散歩して訪ねたお寺、島民のほとんどが菩提寺としていて、瀟響寺のお墓に供えられた花の美しいこと、島では、毎朝お墓に家で育てたお花を供えるのが慣わしということである。心優しくうるわしい。

午前中に赤崎遊歩道に出かける。温泉センターまで行くバスが(乗客は私たちだけ)、もっと先の赤崎遊歩道まで乗せてくれた。島の人あたたかい思いやりが嬉しい。遊歩道は、海の岩場に木で組まれたはしごと歩道が延々と続く。ハマユウ、イソギク、アシタバが道

沿いに生えている。名前のついたいろんな岩を見ながら、温泉まで戻る。2日間、充実した観察会を満喫して帰路についた。

(河野直子)

科学委員会

探索山行「富士山の植生を探る」

7月15・16日、探索山行を実施した。参加者は49名(会員28、会員外21)であった。

15日、バスの中で、講師の石井誠治会員(森林インストラクター・樹木医)より、車窓から見える樹木や地形の解説を受ける。

5合目の小御岳神社では、富士山が4層の火山で成り立っていること、足元の岩が約10万年前の小御岳火山の一部であることに感じ入った。そのカラマツの林で昼食後、標高約2400mの森林境界を縫うお中道を西にたどり、植物の様子を観察した。

お中道はカラマツ、ダケカンバ、ミヤマハンノキなど、養分に乏しく、水分も少ない環境の厳しい場所に根をはれる樹木の限界である。ここから上は高山帯であり、荒涼とした火山荒原をオンタデが、乏

しい水分の縄張り争いの結果、まるで畑に植えられたような間隔で、点々と頂上に向かって生え進んでいる様子を観察した。その遺骸が積もり、僅かの土壌が出来たところにカラマツ、ミヤマハンノキなどの幼樹が生えている。それが成長して成木になるのは、火山礫の移動や劣悪な気候条件のためかなりの困難を伴うだらう。地面に這い蹲った老カラマツや、東側にしか枝のつかない風衝木に、この辺りの冬の西風の強さを思った。積雪で押し曲げられたダケカンバの姿を見たあと、御庭では側火山の

ゆったりチョモランマベースキャンプ15日間 10/27~11/10
 成都~ラサ~シガツェ~チョモランマBC~カトマンズ ¥578,000

Wec 株式会社ウェック・トレック
 国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
 〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
 電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

噴火口に目を見張った。精進湖方面に向かつて多くの側火山が点々と連なる景色から、プレートとの押し合いによる富士火山の活動のメカニズムを理解した。

予定では、3合目までの針葉樹林を歩くことになっていたが、時間不足のため変更。バスで山梨県環境科学研究所に向かう。ここで、所員から富士山の成立、動・植物の種類や分布、環境問題についての説明を受けた。

忍野の宿舎では、夕食後も石井講師を囲んで熱心な質疑応答が楽しく続いた。

16日は大雨であったが、バスで奥庭まで入る。雨が止んだところで、3合目までの亜高山帯でシラビソとコマツガの林を観察した。コケに覆われた林床が暗く見えるほど針葉樹が茂った地域では、森が強風を防ぎ日影を与え、コケが水分を保持する安定した関係を観察した。また、親樹が倒れてできたギャップでは、光が射して世代交代が進む様子を観察することができた。その後、精進口登山道を下り、植生の垂直分布も観察した。針葉樹林があつという間にブナやミズナラなどの広葉樹林に変化し、

青木ヶ原樹海付近では、突然、樹林の中にヒノキの群落が出現したのには驚かされた。最後に富士風穴を見学して帰途に着いた。

(末廣担)

丹水会

創立25周年記念事業

丹沢の麓、厚木市の小さな中華料理屋で「山の仲間仲良く楽しくやらなくちゃー」と言う発起人の呼びかけで集まった9人の小さな会は、今年で創立25年を迎えた。会長なし、会則なし、会費なしの運営が功を奏したのか、毎回出席を呼びかけるメンバーは、1000



記念式典の集合写真

短歌と俳句

山の涼気

月山のみどりの風が心地よくついと手を出す受けとめてみる

鳥海ゆ雪溪を踏みし靴底の軋みの音もいまはまぼろし

諦めし鳥海なれどむなおくに雪溪踏みし軋み聞こゆる

鳥海はもはや及ばぬ峯なるか帯状疱疹に何か奪われ

滝壺より湧き上る涼気なにか棲む知るか知らぬか対の蜻蛉

大橋克也

熊野古道 高野山より熊野、那智へ

筒鳥や町石たどる高野みち

花茨女人遍路に越されけり

五月雨の老杉灌ぐ奥の院

十津川の濁りゆたかに桐咲ける

夕虹や輿駈けの尾根雲を出づ

小林碧郎

果無の山脈雲にほととぎす

丹の宮居椰の大樹も若葉して

瑠璃鳥仰ぐ大門坂の苔の磴

仰ぎ来し瀧の飛沫に荷をおろす

瀧しぶき享けて香煙揚げけり

名を超える会に成長した。

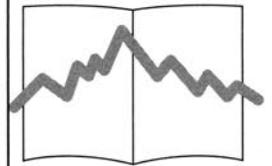
その間、会の活動として、集會ごとに古くから丹沢を歩いておられる方々を講師に招き、丹沢の歴史として、そのときの話を冊子『丹水』にまとめ、会の活動記録とともに、周年記念として発行しており、今回25周年記念では4号が発行された。

記念式典は、4月23日、発足の地である厚木市内のホテルで行なわれ、山岳会からは田邊副会長、岳界からは元JCCの古川純一氏

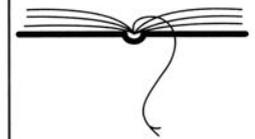
も出席され、会場に花を添えていただいた。会の歩みをビジュアルで紹介するなど、老若の和やかな交流が行なわれ、最後に創立以来25年間事務局を引き受けた古谷氏に感謝状の贈呈を行ない幕を閉じた。

なお50回集會は、初めての試みとして6月24日、日帰り山行で4コースからの塔ノ岳集中登山を行ない、山頂で懇親を深めた。

(大槻利行)



図書紹介



『サバイバル登山家』

服部文祥・著



2006年6月
みすず書房発行
四六判 257頁
定価 2520円

の水準を遥かに凌ぐ、著者の卓越した文章能力に、旧知の間柄である私も、今回あらためて驚かされた。

本書は、手に汗握り息を呑むような山行記も豊富に綴られてはいるが、狭い世界の中で記録を発表するために書かれた山岳ノンフィクションの範疇には収まらず、一つの文学作品として、著者の哲学を語り尽くさんとした書である。

そのためもあってか、言葉の選び方には細心の気配りをしたのであるう、ひたすらに読みやすく、熱い語りに引き込まれていく。

〈野生動物のようにひっそりと生まれて、ひっそり死んでいく。死んだことすら誰にも確認されない〉それは僕が山登りで究極に求めているものの一つだった。

この一文にこそ、著者が言わんとすることのエッセンスが全て凝縮されているように私には思えた。

読み始めて間もなく、かの鉄人登山家ワルテル・ボナッティ氏を想起した。極限のアルピニズムから究極のアドベンチャーツーリズムへの転進、というより昇華というべきか、これは真の冒険家にとって永遠のテーマなのかもしれない。さらに言えば、それを世に問いたいという「自己顕示欲」も含まれて。

内容は十分に濃いものの、値段は少し高めである。しかし、間違いない良書であり、会員諸兄姉にはぜひ一読されたい。

(熊崎和宏)

米倉久邦・著

『六十歳から百名山』



2006年4月
新潮社発行
B6判 351頁
定価 1680円

昭和39年、新潮社より深田久弥氏の『日本百名山』が上梓され、その後、百名山を踏破したいという人たちの激増と、山岳書の一ジャンルとしていわゆる百名山ものが

が認知され、一種の社会現象となった。多少とも登山に関心を持つ人、若い頃山登りをした経験のある人にとっては、深田百名山の中から自分の登ったことのある山をリストアップしてみれば、30座や40座はあるに違いない。もうちょっと頑張れば百座完登も夢ではないと考える人たちによって、百名山巡りはブームとなった。それと同時に同じ山のオーバーユースと中高年登山者の遭難が社会問題ともなった。

奇しくもこのたび同じ新潮社から刊行された本書『六十歳から百

カラコルムは、トレッカーを待っています。

**K2・バルトロ氷河ヘリ・フライトと
コンコルディア着陸12日間** 東京発着

出発日: 8/28・9/18発 旅行代金: 548,000円

**K2・バルトロ氷河
トレッキング25日間** 東京発着

出発日: 8/25・9/8発 旅行代金: 582,000円

国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 © 東京山岳会
ALPINE TOUR SERVICE 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

名山』は、類書の中にあつて極めてユニークな発想のもとに実行された百名山登頂の記録である。

著者が己に課したルールの一つは、60歳から2年と期間を限つて、しかも、過去に登つたことのある山といえども除外せずに新たに全山踏破を目指すことにある。つまり、平均すると週に1座づつということになり、それはかなり苛酷なスケジュールと言わざるを得ない。もう一つのルールは可能な限り難しいルートから登頂することである。

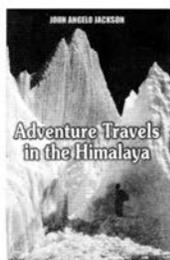
評者から見て百名山のうち、難度が高いと思われる幾つかの山について、著者が採用したルートは60歳という年齢にしてはほとんど信じ難いものである(剣岳を平蔵谷からスキーで往復、北鎌尾根から槍ヶ岳など)。それもほとんどが単独行である。比較的平易なルートを取るときでも、その脚の長さは天狗様の再来かと思わせるものがある(甲斐駒ヶ岳黒戸尾根日帰り往復など)。

深田氏の百名山が例えばヒマラヤの処女峰の初登攀であるとするならば、米倉氏のそれはバリエーションルートからの初登攀に例え

てもよいであろう。正月の冬富士単独行に始まり、2年後の暮れに宮之浦岳単独行で百名山を締めくくつた、百編の記録の集大成が本書である。また、著者個人の記録だけでなく、一山ごとに豊富な逸話が添えられている。著者の本業であつたジャーナリストの本領が発揮されているというべきであろう。百名山を志す岳人ではなくとも、本書は一読に値するものと感ぜせられた。

(箕岡三穂)

John Angelo Jackson・著 『Adventure Travels in the Himalaya』



2005年発行
Indus Publishing
Company (New Delhi) 刊
256頁
Rs.400

60余年にわたるヒマラヤを主とした探検旅行記である。著者は1953年、エヴェレスト初登頂に成功した英国遠征隊の裏方を務め、また55年、初登頂に輝いたカンチエンジュンガ隊の登山隊員といつ

た本格派だ。また、エヴェレストからカンチエンジュンガまで20日間かけて初めて単独で歩き、最近では05年にヒマラヤ入りをしてい

る。
1944年「ビルマの丘とカシミール・ヒマラヤ」、45年と76年「世界の小屋根、ラダック」、54年「エヴェレストと捉えどころのない雪男」、55年から02年まで4度の「カンチエンジュンガ」、54年「エヴェレストからカンチエンジュンガの長旅」、81年「ナンダ・デヴィとトリスル」、54年と98年「シエルパの地再訪」「シエルパの村ともてなし」、82年と93年「シッキム、テンジンと聖なる谷」など、時系列的ではないが、全部で29編が収められている。

探検要素の多いもの、本格的な登山、ヒマラヤの文化と生活、半世紀間のヒマラヤの環境・人情・生活の変化、再訪問した時のテンジンなど、現地に住む人びととの再会や彼らの反応など興味は尽きない。

なかでも、今昔のカンチエンジュンガやラダック訪問、雪男や狼の足跡の追跡、中国との国境紛争の影響、ヒマラヤでのスキーなど



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京 / 〒160-0008 東京都新宿区三栄町25	三栄ハウス202	TEL 03-3341-0030
大阪 / 〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5	中央谷町ビル501号	TEL 06-6946-9111
名古屋 / 〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113	オークラビル6F	TEL 052-788-2422

が好奇心をかきたて、また氷河から流れ出る冷水の激流ドゥード・コシを泳いで徒渉するなど、随所に記されているエピソードが面白い。長編、短編が混載し、どこから読み始めても気軽に読めるところが良い。

人里離れた山村、交易路、人物など僻地を旅した人にしか撮ることが出来ない多くの貴重な写真は資料的価値もある。惜しむらくは、馴染みの薄い地方だけに理解を助ける概略地図がもう少し欲しかった。

(南井英弘)

同志社大学山岳部山岳会・編

『山その大なる旅』

同志社大学山岳部・山岳会
80年の足跡



2006年5月
同志社大学山岳部・山岳会発行
A B変型判 670頁
定価 5000円

同志社大学山岳部・山岳会(以下D A Cと略)は、1925(大正14)年に創設されたスキー部、その原点がある。本書はその80年におよぶ歴史をまとめたものである。

美しい多くの写真とともに、国内外の行動と足跡、山に逝った仲間や先輩の思い出などの他に膨大な年表がある。全部で670ページに及ぶ大冊であり、古い記録を探り、ここまですべてまとめられた関係者の努力に敬意を表したい。

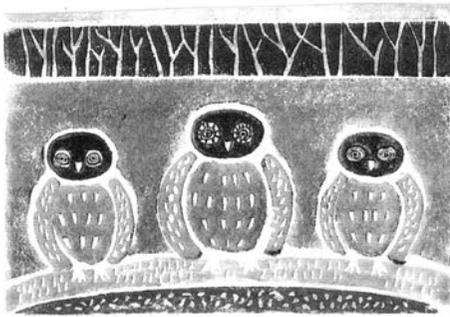
同志社大学の校祖新島襄は登山を好み、心身を鍛える教育の手段として、全校生徒に「山河跋涉」と名づけた登山活動を奨励した。この行動が同志社の山登りの原点

になっているというのは興味深い。同志社で学んだ河口慧海もその影響を受けた一人であろう。

D A Cの足跡は、戦前の千島、台湾、カラフトなどをはじめ、戦後のヒマラヤはもとより、南米アンデス、アマゾン、ロシア、中国など世界中に印している。特に外貨制限厳しいときの60年のアピ、熱帯から山麓まで43日間のキャラバンの末のサイパルをはじめ、冬のダウラギリ、四姑娘峰、ナムナニ、カント、さらに02年の西チベットの秘峰カキユカンリなどの初登頂など、まさにD A Cのバイオニアワークの発露である。しかもすべてが全員無事で、初登頂に成功していることは特筆に値し、見事である。またその対象がほとんど許可取得の困難な辺境地域であることが、D A Cの着眼点のすばらしさと、対外交渉力のすごさを示しており、成果の価値を高めている。歴代会長はじめ関係者の努力により、そのバイオニア精神は受け継がれ、多くの後輩が続いている歴史は、読む者に伝統のあり方を

示し、組織は人であるという感を深くする。そこには常に未知を求める夢があり、その実現のために多くの困難を乗り越えていく行動は感動的ですからある。巻末にある「山岳部を考える」という座談会は、大学山岳部が存続の危機に瀕している現状を分析し、対策を考える意味で示唆にとみ、興味ある。

一山岳部・山岳会の歴史というより、我が国の登山史という意味からも一読に値する好個の書である。A B変型判の縦書き2段で、紙面が大きく読みやすいのもありがたい。(平井一正)



幸福を呼ぶ鳥 奥野溪石

今年もさげしんで会いましょう

図書受入報告 (2006年7月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
富田弘平	どこかへワンダーハイク	239pp/21cm	新ハイキング社	2006	著者寄贈
AGS-J資格審査委員会(編)	AGS-J Guide Manual(Chapter 1. ガイド論)第2版	89pp/30cm	日本アルパインガイド協会	2006	発行者寄贈
AGS-J資格審査委員会(編)	AGS-J Guide Manual(Chapter 2. 山岳共通技術)第3版	103pp/30cm	日本アルパインガイド協会	2006	発行者寄贈
AGS-J資格審査委員会(編)	AGS-J Guide Manual(Chapter 4. レスキュー技術)第4版	125pp/30cm	日本アルパインガイド協会	2005	発行者寄贈
岩村和彦	ganさんが廻り北海道の沢登り	218pp/21cm	共同文化社	2006	著者寄贈
四手井綱英	森林はモリやハヤシではない——私の森林論	277pp/20cm	ナカニシヤ出版	2006	著者寄贈
矢野桂司	デジタル地図を読む(叢書地球発見 第6巻)	149pp/19cm	ナカニシヤ出版	2006	出版社寄贈
豊野則夫	北アルプスの沢	166pp/21cm	白山書房	2006	出版社寄贈
立松和平	百霊峰巡礼(第1集)	298pp/20cm	東京新聞出版局	2006	出版社寄贈
町田洋 他(編)	日本の地形(第5巻)——中部	385pp/27cm	東京大学出版会	2006	出版社寄贈
北中康文	日本の滝(2)——西日本767滝(ヤマケイ情報箱)	495pp/21cm	山と溪谷社	2006	出版社寄贈
神崎忠男(監修)	ハンディ地形図25000——槍・穂高 北アルプス南部	224pp/15cm	キョーハンブックス	2006	出版社寄贈
長岩嘉悦	焼石岳に魅せられて	180pp/20cm	無明舎出版	2006	著者寄贈
上田茂春(編)	“鳥山房蔵 山岳遭難関係文献、及び岳人の追悼・遺稿文献目録”	184pp/26cm	鳥山房	2006	購入



7月理事会

日時 7月12日 18時30分～20時

30分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 平山会長、平林・橋本・

田邊各副会長、吉永・賛田・石田・

篠崎・野口・斎藤・藤井・石橋・

古野各理事、山本・竹中各監事、

小倉・重廣・今村各常任評議員

【委任】 大蔵・渡邊各理事

● 議事に先立ち、平山会長より、本年前半最後の理事会であるが、多くの重要な議案があるので、十分な審議をお願いしたいとの挨拶があった。

【審議事項】

1 平成18年度第1・四半期末の財務状況について

● 収入 5233万4427円

(対予算 71・38%)

● 支出 1540万4006円

(対予算 20・76%)

● 賛田財務担当理事より概ね順調

報告

に推移している旨、報告があった。

2 創立100周年記念事業特別会計について

平成18年6月末

● 収入 1億353万2784円

● 支出 8359万8544円

● (7月繰越 1993万4240円)

● 吉永特別会計担当より、本年度

末までの支出は1000年史発行費及び中央分水嶺踏査事業関連費が主たるものである。若干の剰余で決算ができると予測している旨、報告があった。

3 支部長会議における質問等に対する回答内容について

5月20日開催の第1回支部長会議の際に各支部長より質問された事項の回答内容について、別紙により担当より次の説明があった。

● 主な質問内容

①「百年史」の配布について

②「公益社団法人化」のメリット及

びデメリットについて

③「ジャパニーズ・アルパイン・ニ

ュース」の配布について

④「社団法人東京都山岳連盟」への

加盟について

⑤「会友制度」について

(承認)

4 中央分水嶺踏査事業について

報告書の発行およびフォーラムの開催計画について石田理事より説明があったが、報告書の体裁およびフォーラムの内容等に明確でない事項がみられたため、100周年記念事業実行(委)で再検討した上、次回理事会に再提案することとなった。

(継続)

5 医療委員会：講演会「中高年

登山の注意点」開催について

9月5日、初めて関西地区で開催する。

(承認)

6 物品使用許可願：社団法人

中部経済連合会

機会誌の特集でウェストン氏写真の掲載許可願い。

(承認)

7 資料借用・写真掲載許可願：

黒部市歴史民俗資料館

9月2日～11月26日開催の特別展における冠松次郎氏の写真・資料の借用及び掲載許可願い。

(承認)

【報告事項】

1 マナスル初登頂50周年記念式典及び記念ツアーについて(田邊)

12月11日カトマンズにおいて記念式典をネパール山岳協会主催で実施することに決定した。これに併せて記念ツアー(トレッキング)を前回の計画で行なう予定で、7月号会報にて広報する。

2 海外登山の長期計画について

2回のプロジェクト・チームの会合を開き、具体化を推進している。目下、次の案を検討中。

(橋本)

①年2回程度の「ヒマラヤ登山塾」の開催

②カンリ・ガルポ山群の地域研究

③登山隊の派遣(当面の目標を東チベットルオニイ峰として検討・推進)

3 「第2回支部長会議」報告(吉永)

7月1日～2日、信濃支部の協力を得て上高地山岳研究所で開催した。本会の貴重な財産としての山岳研究所の利用促進についても各支部長のご理解を得た。

4 勤労者山岳連盟新事務所完成披露パーティー(吉永)

山岳4団体の一員である芳山の
新事務所が完成したことに伴う披
露パーティー。神崎総務委員長が
出席した。

5 文部科学省関連 (吉永)

6月17日監事変更届を提出し、
6月24日平成17年度事業報告・決
算及び平成18年度事業計画・予算
提出。ともに受理された。

6 学生部パンバリ・ヒマール遠
征について (吉永)

8月中旬よりマナスル山群。パン
バリ・ヒマールに遠征する。隊員
は5大学6名、日程は8月16日、
10月15日の予定。

7 ルーム外壁改修について (吉
永)

「サンビュールハイツ四番町」の理
事会において外壁の全面改修を決
定し、9月より工事に着手する。
本会としても協力したい。

8 自然保護全国集会について
(篠崎)

10月21日、22日、鳥取県大山で
実施される。多数会員の参加を期
待したい。

9 6月度入会者 14名

ルーム目誌 7月

- 1日 SAN燦会
- 4日 図書委員会 アルパインス
ケッチクラブ
- 5日 事業委員会 山岳地理クラ
ブ
- 6日 山の自然学研究会
- 7日 財務委員会 アルパインス
キークラブ
- 10日 総務委員会 アルパインス
キークラブ
- 11日 二火会 フォトビデオクラ
ブ アルパインスケッチ
クラブ
- 12日 理事会 山想倶楽部 休山
会
- 13日 委員長会議 学生部
- 18日 資料映像委員会 山研運営委員
会 インターネット小委員会
- 19日 山水会 つくも会
- 20日 科学委員会 アルパインス
キークラブ
- 21日 学生部
- 24日 広報委員会
- 25日 九五会 00会
- 26日 常務理事会 ゆきわり会
麗山会
- 27日 自然保護委員会 新土曜会
山遊会

28日 マナスル委員会 緑爽会
31日 中央分水嶺委員会
7月来室者54名

会員異動 (7月)

物故

滝口 脩 (5478) 06・6・2
橋本龍太郎 (8665) 06・7・1
退会

本橋徳一 (8706)

渡邊 照 (9529) 関西

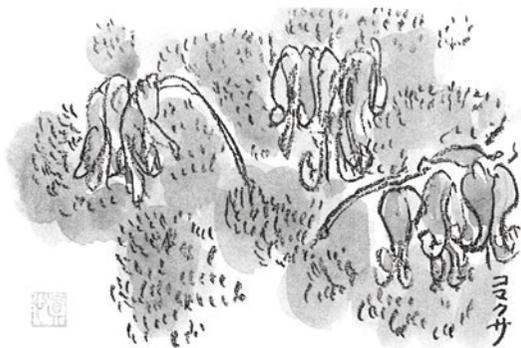
中山重孝 (10811) 京都

堀田明允 (11634) 東海

平野隆司 (14048)

終身会員

高緑繁伸 (6046)



コマクサ 宇都木慎一



◆田淵行男記念館特別企画展

信濃支部

信濃支部60年歴史展。昭和22年6月に設立した信濃支部。支部の60年の歩みを、写真と資料でたどる。

期日 9月5日(月)～10月1日(日)
場所 田淵行男記念館 (TEL) 026-372-9964

入館料 大人(300円)、中学生以下(200円)

問合 古幡開太郎宛 (TEL) 090-5414-0809

*杉本誠収集作品によるモノクローム写真の世界「山 記憶と表現」が同時開催される。

◆北海道「紅葉山行」事業委員会

日時 9月28日(木)～10月2日(月)
集合 9月28日13時 新千歳空港
解散 10月2日12時 旭川(新千歳空港も可)

行程 夕張・芦別・十勝岳登山
(道内は全行程バス移動)

インフォメーション

募集 15名

費用 8万円(宿泊・保険・現地でのバス代・雑費)

申込 FAXか☎で8月27日までに

植木淑美宛 (FAX) 042-734-1498

☎yoshimi-210@smile.odn.ne.jp

◆四国中央構造線断層見学山行

山の自然学研究会

日本列島の誕生を示す中央構造線(徳島・愛媛県)、四万十帯(高知県)などの見学。

日時 10月23日(月)～25日(水)
集合 23日朝 JR高松駅

費用 約4万円(四国内交通費・宿泊費・資料代)

定員 8名

申込 9月30日までに西田進宛
(FAX) 045-822-0141

☎joy@nishida-s.com

*申込者に詳細案内送付
◆第14回山岳写真展「心に映る山々」
アルパイン・フォト・ビデオクラブ

マナスル初登頂50周年を記念して、資料映像委員会が作成した写真パネル7枚も同時に展示。

会期 9月20日(水)～10月1日(日)10時～18時(月曜休館)

会場 ポートレートギャラリー
(新宿区四谷1-7 日本写真会館5階 TEL) 03-3351-3002

問合 川嶋新太郎宛 (TEL) 03-3373-0907

◆会津の山(第2回) 二火会

地元の江花会員と平野会員が行。往復、マイクロスバス使用。

日時 10月17日(火)～18日(水)
場所 志津倉山

集合 JR三鷹駅北口
定員 18名

費用 2万円(宿泊・バス代)
問合 金井一子宛 (TEL) 03-3371-4738

☎ichiko_k@r4.dion.ne.jp

◆講演会「山岳・辺境における救急手当・医療」

イギリスのエヴェレスト南西壁隊をはじめとして、数多くの遠征隊にも参加されたクライマーとしても著名なジム・ダフ博士を招いて、医療施設から離れた山岳地帯や辺境の地での救急手当・医療の

講演会が次のとおり開かれる。

【共催】(社)日本山岳協会、(社)日本山岳会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト

【協賛】旅行業ツアー登山協議会

【日程と会場】

●東京(東京体育館第1会議室)
日時 9月20日(水)18時30分～20時 30分

●大阪(業業年金会館)
日時 9月21日(木)18時30分～20時 30分

●札幌(りんゆうホール)
日時 9月22日(金)18時30分～20時 30分

【参加費】500円

【申込・問合わせは】FAX、☎、ハガキなどで行なう

●東京Ⅱ貫田宗男宛
(FAX) 03-3437-8849

☎info@everest.co.jp

〒105-0083 東京都港区西新橋3-24-8
山内ビル4階WEC内

●大阪Ⅱ林孝治宛
(FAX) 072-9153-7456

☎GEF05077@nifty.com

〒583-0886 大阪府羽曳野市恵我之荘
5-1-25

●札幌Ⅱ佐藤信二宛

● さんけん通信 ●

長野県をおそった大雨
山研管理人 内野かおり

大雨で川幅が広がり、大木の流れる梓川

山研の管理人として2度目の夏を迎えた。去年は慣れぬ上高地で、1歳の娘を連れ不安な時を過ごした。でも今年は、2度、3度と訪れてくださる顔なじみの会員の方々とも親しくなり、ちょっぴり余裕ができた。

夏山シーズン到来の7月中旬、長野県は記録的な大雨にみまわれた。7月15日から降り続いた雨で、上高地周辺に被害が出はじめた。7月18日、釜トンネルから上は雨量規制により、朝から通行止めとなった。また、国道158号線も雨量規制に加え、数箇所土砂崩れが発生し、通行止めとなり、復旧のめどはたたない状態であるという。緊張しながら天気予報に聞き入り、不安な時を過ごした。

19日午前中、雨が小降りになったので山研の水源の善六沢を見に行く。大きな石や土砂が積もり、流れや地形も変わり、荒れていた。濁流と化した水源を見て、途方にくれた。天気予報では再び大雨の恐れがあるというので、復旧作業にはいつ取りかかれるのかわからない状況であった。私たちは雨水を利用して生活し、水の節約をして暮らした。

20日、大雨による規制が解除され、上高地までの道は通行可能となった。しかし、上高地では閉店する売店も多く、宿の予約もほとんどキャンセルのようであった。

山研にも、飲料水の確保という大きな問題が発生していた。水量が落ち着き次第、水源の復旧作業を行わなければならない。その復旧作業にも幾つかの問題があった。①取水パイプの再配置(パイプの乱れに加え、大きな石が流れてきたことにより、取

水口の配置が変わった)②沢の濁りがいつ収まるか③すでに地盤が地んでいるため、今後の雨による土砂の押し出しなどの可能性、などである。

22日、取水口の復旧工事を行なう。結果、①については見通しがついた。しかし、依然として②③については不透明、前線による雨の影響を受けそうで心配だ。加えて、山研のミニ水力発電は当面休止状態である。

上高地町会情報より、遊歩道および登山道の状況が入った。河童橋から明神池間の右岸の遊歩道は通行不可能(代わりに治山道を利用)。登山道は随所に被害があるが、通行は可能であるという。山研ではこの状況を、随時、山研委員長の堀さんに報告しながら対応した。結果、7月30日までの宿泊はキャンセルさせていただくことにした。せっかくの予約であり申し訳なかったが、皆さんに状況を把握していただいた。

今、上高地には、再び鳥たちがさえずり、さわやかな風と青い空、そして美しい梓川の流れが戻り、穏やかな時間が流れはじめた。梓川周辺で散策を楽しむ人、穂高や焼岳の雄姿を眺める人、カメラを抱えた人、絵筆を持つ人などで賑わい、絶好のシーズンを迎えている。

山研も、7月31日からやっと予約を受けつけられる状況になった。しかし、しばらくの間は状況に応じ、風呂の休止など、ご不便をおかけする事もあるという現状をご理解いただきたいと思う。

完全復旧に向け、山研委員および関係者の方々のご指導をいただきながら、作業などをすすめている。

日本山岳会会報 山 735号

2006年(平成18年)8月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 平山善吉

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社

●編集後記●
●今年の山は残雪が異常に多く、また梅雨は8月に入ってやっと明きました。遅い夏山の幕開けでした。温暖化による異常気象の影響かと気になります。
●そんなときに、東海大学山岳部によるK2登頂のニュースが飛び込んできました。今ごろ「日本人女性初」かとちよつと驚きました。が、まずはうれしいニュースでした。(神長幹雄)

■訂正とお詫び
7月(734)号27ページ4段8行「羽田栄治写真展」は「アルパインフォトクラブ写真展」の誤りでした。お詫びして訂正します。

〒011-765-1939
〒001-0901 北海道札幌市新琴似1-1-6(26)
sshin02525@yhb.ne.jp
FAX 011-765-1939